

高品質肉用鶏の長期安定出荷技術

太田原 健二・仁昌寺 博・小野寺 勉

(岩手県農業研究センター畜産研究所)

Long-term and Equilibrium Production Technique of Local Chicken Breed

Kenji OTAWARA, Hiroshi NISHIOJI and Tutomu ONODERA

(Iwate Agricultural Research Center, Animal Industry Research Institute)

1 はじめに

「南部かしわ」は昭和60年(1985年)に岩手県が開発した高品質肉用鶏であり、3品種(軍鶏、ホワイトロック、岩手大型ロード)の供用と、雄14週齢、雌16週齢屠殺を指標としてきた。

また、これまでブロイラー用飼料の利用を指導してきたが、高品質肉用鶏として健康・安全食品の生産を主眼とした差別化も今後の検討課題である。さらに、薬事法による出荷規制を受けずに、中抜き出荷によるフレッシュ肉の長期・安定供給も必要な技術となっている。

そこで、肥育期間中に抗生物質等の飼料添加剤を含まない飼料の給与試験を実施し、生産効率と食肉としての適合性、安定供給の可能性を検討した。

2 試験方法

試験区の構成と給与飼料の成分、及び日齢に応じて給与した飼料の種類を表1に示した。

育雛バタリーで育成した4週齢の「南部かしわ(軍鶏×(劣性ホワイトロック×岩手大型ロード))」をウィンドウレス平飼い鶏舎に坪当たり9羽を収容し、出荷日齢(雄14週齢、雌16週齢)まで肥育した。

飼料添加剤を含まない市販のブロイラー仕上げ飼料を、4週齢から出荷まで給与する区を「仕上げ飼料区」とし、雄30羽、雌29羽を配した。

4週齢から10週齢までを中期飼料、10週齢から屠殺前7日までを後期飼料、屠殺前7日間のみ仕上げ飼料を給与した区を「慣行飼料区(対照区)」として、雄31羽、雌28羽を配した。

3 試験結果及び考察

表2に各試験区の出荷率を示した。

出荷率については、仕上げ飼料区と慣行飼料区すべての

表1 給与飼料と成分 (単位: %, Kc)

日 齢	1	28	70	屠殺-7	屠殺	備 考
仕上飼料区	前期	仕上げ飼料		衛生プログラム		
慣行飼料区	前期	中期	後期	マレック 0日		
成 粗 蛋 白	21.0	18.0	15.0	18.0	栄養剤 1,26~28	
分 粗 脂 肪	3.5	2.5	2.5	5.0	抗生剤 1~3	
代謝エネルギー	2,950	2,800	2,750	3,170	NB生ワク 4,25	

試験区において100%であり、出荷日齢(雄14週齢、雌16週齢)まで飼料添加剤を含まない市販のブロイラー仕上げ飼料を給与することによっても、良好な出荷率が得られた。

表3には4週、8週、14週及び16週でのそれぞれの体重を、また、表4にはそれぞれの期間の1日当たりの増体重を示した。

1日当たりの増体重については、4週から8週で慣行区の30.2kgに対し仕上げ区で32.3kg、8週から14週で慣行区の24.8kgに対し仕上げ区で27.1kgであった。全期間では、

表2 出荷率

(単位: 羽, %)

飼 料 ・ 性		肥 育 (4~14・16週齢)		出 荷 率
		開 始	終 了	
仕 上 げ	雄	30	30	100
飼 料 区	雌	29	29	100
慣 行	雄	31	31	100
飼 料 区	雌	28	28	100
全	体	118	118	100

表3 発育成績 I

(単位: g)

性・飼料		各週齢の体重			
		4 週 齢	8 週 齢	14 週 齢	16 週 齢
雄	仕上(30)	506 ± 36	1517 ± 98	2926 ± 206	—
	慣行(31)	491 ± 38	1436 ± 136	2686 ± 233	—
雌	仕上(29)	436 ± 32	1232 ± 112	2088 ± 191	2333 ± 217
	慣行(28)	438 ± 36	1177 ± 105	2038 ± 177	2218 ± 168
飼料間有意性		N. S.	*	*	*
仕上飼料平均		472 ± 49	1376 ± 178	2514 ± 466	2333 ± 217
慣行飼料平均		469 ± 47	1314 ± 178	2354 ± 404	2218 ± 168

注. 平均値±標準偏差

表4 発育成績 II

(単位: g, 円)

性・飼料		1 日平均増体重			要求 率	飼料 費
		4 W ~ 8 W	8 W ~ 14 W	全期間		
雄	仕上(30)	36.1 ± 2.9	33.5 ± 4.0	29.7 ± 2.1	3.82	197
	慣行(31)	33.7 ± 4.0	29.8 ± 3.0	27.3 ± 2.4	4.44	185
雌	仕上(29)	28.4 ± 3.1	20.4 ± 2.3	21.0 ± 2.0	4.23	220
	慣行(28)	26.4 ± 2.8	19.3 ± 1.7	20.0 ± 1.5	5.22	215
飼料間有意性		*	*	*		
仕上飼料平均		32.3 ± 4.9	27.1 ± 7.4	25.5 ± 4.8	3.99	208
慣行飼料平均		30.2 ± 5.1	24.8 ± 5.8	23.8 ± 4.2	4.77	200

注. 平均値±標準偏差

全期間の D. G.; 雄 4~14週齢, 雌 4~16週齢
飼料費; 生体 1 kg 生産のための費用

表 5 解体成績

(単位: g, %)

性・飼料	屠殺前 重 量	屠 体 重 量	ム ネ 重 量	モ モ 重 量	ささ身 重 量	精 肉 歩留り
雄 仕上 (30)	2907±207	2697±185	364±29	608±55	107± 9	39.8±1.4
慣行 (31)	2686±235	2521±235	331±37	565±57	98±13	39.5±1.7
雌 仕上 (29)	2270±223	2081±203	317±43	470±51	97± 9	42.5±1.8
慣行 (28)	2210±178	2027±156	313±31	457±42	96± 8	42.7±1.3
飼料間有意性	**	**	**	*	*	N.S.
仕上飼料平均	2624±383	2424±364	342±42	546±87	102±10	41.0±2.1
	∨	∨	∨	∨	∨	=
慣行飼料平均	2483±318	2310±319	324±36	519±74	97±11	40.9±2.2

注. 平均値±標準偏差

$$\text{精肉歩留} = \frac{\text{ムネ} + \text{モモ} + \text{ささ身}}{\text{屠体重量}} \times 100$$

慣行区の23.8kgに対し仕上げ区で25.5kgとなり、粗たん白質、粗脂肪含量の高い仕上げ飼料の利用により、4週齢以降の1日平均増体重が改善され、8週齢、14週齢での体重を大きくすることができた。また、飼料要求率は3.99を期待でき、生体1kg当たりの生産に要する飼料費は208円と、慣行法とほぼ同等であった。

表5には、各部位別の解体成績を示した。

仕上げ飼料の利用により肥育終了時の体重が大きくなり、各部位の筋肉重量においても有意な差が認められるが、精肉歩留りには差は認められなかった。

表6には、長期・安定出荷に対応できる羽数の割合を示した。

表 6 長期・安定出荷に対応できる羽数の割合

項目・週齢	12	13	14	15	16	17	18
仕 上 げ 雄 (30)	17	60	20	3			
飼 料 区 雌 (29)			28	28	17	7	20
慣 行 雄 (31)				100			
飼 料 区 雌 (28)						100	

注. — は雄2.6kg, 雌2.2kg以上に達し、早期安定出荷に対応できる割合(推定)

仕上げ飼料給与により、雄の77%、雌の56%が標準とする出荷予定日以前に中抜き出荷できることが明らかとなった。

屠体の検査結果においては、両区に差がなく十分に食用に供することが可能と認められた。

4 ま と め

高品質肉用鶏「南部かしわ」を4週間の育雛終了後、飼料添加剤を含まないブロイラー仕上げ飼料を給与し、発育性、産肉性、食鳥検査適合性等を調査した。

成分的に勝る仕上げ飼料の給与により、発育が改善され、雄の8割、雌の6割が標準とする出荷予定日以前に中抜き出荷でき、出荷率も良好であるとの指標を得た。

また、屠体の検査結果においても慣行肥育と比較して差がなく、十分に食用に供することが可能と認められた。

このことから、衛生対策に万全を配しながら、「南部かしわ」を仕上げ飼料で肥育する方法は、新鮮肉の安定供給のためにも、イメージ向上のためにも有効であると考えられる。